

---

# 僕とレイルの取っ替え騒動記

夕原あかね

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕とレイルの取っ替え騒動記

### 【Nコード】

N6653C

### 【作者名】

夕原あかね

### 【あらすじ】

書庫で見つけた怪しい本……………その本を開いたとたん、気づくと僕の目の前に僕がいる！？僕の体に自称魔族の王(?)レイルが入り込んでしまったからさあ大変！日常をぶっ壊したドタバタ騒動、ただいまスタート！

## 一話目：事の始まり

「はあ………全くやんなっちゃうよ」

と、さつきから小言をつぶやきながら、僕―ちが知我ひかる 光は図書室の本の整理をしていた。

先輩に言われて、さつきから何百冊……いや、何千冊もの本を一年生全員で整理している。

僕は奥の書庫の本を整理しているのだが、この仕事がえらく暇で、地味だ。

普通解放しているところに並んでいる小説などとは違い、ここに置いてある本はえらく分厚く、中身がなんじゃこりゃ的な本ばかり。主な原因はこれだ。

そしてもう一つ………

「ん？なんだこの本」

僕は一冊の本を手を取った。

他の本と同じく、えらく分厚いことには変わらないのだが、この本だけあまり埃がかかってない………どうやら最近ここに置かれた本のようにだ。

試しにぺらぺらとめくると―

あるページで、突然本がまばゆい光を発した！

「!!!!!!!!!!!!!!」

カッ！！

ブ  
ウ  
ワ  
ツ  
！  
！

ー  
う  
わ  
っ  
！  
！

んん……ここは………

なんだか意識がぼうつとしている。

どうやらここは、さっきと同じく、書庫のようだ………

「うう………」

??

なんだか側でうめき声がした。誰か入ってきたのだろうか？

「うう………ここは…」

低い声の方を向くと、目の前には見覚えのある背中がみえていた…

………

………え？

一瞬目を疑った。

いや、目は正常だ。

でも、確かにこの人物の着ている服は、今日僕の着てきた服と全く同じ（あ、僕の中学は自由服なので、そこんところろしく。

似たようなくしゃくしゃ頭。

短い足。

声もかなり低いが、質はどことなくそっくりだった。

―あの……

なんだか変な感じがする。

僕の声が届いたのか、その人物はさっとこちらへ振り返った……

―……え????

また目を疑った。

だから目は正常だって。

でも、目の前の光景は信じがたいものだった。

青い服、黒いズボン―お世辞にもセンスがいいとは言えない、今日僕が着てきた服。

くしゃくしゃ頭の短足。

そして、あまり頼りなさそうな感じがする目と、そこにかけられた丸渕の眼鏡。



## 二話目：最初の出会い

僕はもう一度よく目の前の人物を確認してみた。

………やっぱりどっからどう見ても自分だ。

………あれ、じゃあこの考えたり驚いたり時々説明口調になったりするこっちの僕は、いったい何？

「さっきから何をしているのだ」

いきなり目の前の自分が話しかけた。

思わずうわっ、と声(?)を出して目の前にいる自分の方を見た。

「………腰が抜けたのは分かったが、とりあえず立ったらどうだ」  
相手が言った。

―ああ、そういうばそうだね。

僕はいつも通りよいしょと立とうとした。…  
うわっ！

なんとそのままいきなり体がふわっと宙に浮いてしまった。

………なんだか体がめっちゃめっちゃ軽い。

紙切れよりも軽いみたいで、ちよっと力を入れるとすぐにふわっとどこかに飛んでいってしまいそうだ。

―………何これ？

「分からないか？今、おまえの魂がそこに浮いているのだ」  
へ？

そう思って僕の体を見ると、案の定、目の前の自分と全く同じ見た目だったものの、体はしっかり透けていた。



—えええ！僕、どうなっちゃったの？

驚きのあまり声（？）をあげてしまった。

「……どうやらおまえがその本を開いてしまったために、私がおまえの体に入り込んでしまったようだ」

目の前の自分のはあ、とため息をついた。

「しかし、ここは何処なのだ？」

—それは僕のセリフだよっ！ 君こそ僕の体に入り込んで、いったい誰なのさっ！

僕は目の前の彼を激しく問いただした。

「…私の名はレイル。おまえ達とは違う『魔族』の王……だったはずだ」

いきなり語尾がしぼんでいった。

「……しかし、ここは何処なのだ？何者かによって封印されたのは覚えているが………ええい！ここはいたい！」

—ち、ちよっと落ち着きなよ……

彼—レイルは少し落ち着きを取り戻すと、再び口を開いた。

「悪かった……で、ここは一体……」

—風見中学校の書庫。ここに君が言ってるその本があったんだよ。

僕はさっきの本を指さして言った。

「学校の書庫？ ふっ、私もずいぶん落ちたな………」

—…で、君は一体何者なのさ？さっき『魔族』って言ってたけど…

……

「ああそのことか」と、レイルが口を開いた。

「簡単に言えば、人間とは違う別の種族だ。翼を持つもの、牙を持つものなど様々だが、その力はすべての種族において最強のものを持っているのだ」

「へえ……じゃあ、その王っていうのは、一体どれくらい強いのですか？」

僕はまだ少し怒りながら言った。

「今は分からないが……昔はこの建物など、指一本の力を加えるまでもなく、崩壊させたぞ」

そ、そんなばかな……

一体どれだけお強いんだ？ レイルは……

「……それほどの力を持つ種族だ。人間は様々な手段を使って我々を封印しようとしてきたぞ」

「へえ。何で魔族を倒さなかったの？」

「結論から言うと、不可能だからだ。ましてや魔族の王を倒すなど、同じ立場のものにしかできないからな」

……よっぽどなんだな。彼らの強さって言うのは。

なんだか目の前に立っている自分が、急に恐ろしく見えてきたよ。やっぱり中身は魔族の王だからかな。

「まあ、それで結構な時間封印されたのだが……どうやらかなり封印の力が衰えていたようだ」

レイルは本を横目で見て言った。

「そんな状態の時、おまえがこの本を開けたりするから……」

「……………しょうがないよ。それより、何でこの本が、こんな学校の書庫にあるわけ？」

「さすがにそこまでは私も…」  
レイルが言いかけた時だった。

「知我あ！ さっきから何やってんだあ！！！」

### 三話目…恐怖のお方登場！

突然の声に、僕たちは一瞬ビクツとした。

そして書庫のドアが（かなり乱暴に）開いた。

「知我あ！ おまえ今何時だと思ってるんだよ。とっくに活動時間は過ぎてるぞ！」

―げっ、小春先輩……

彼女の名前は瞬美<sup>しゅんび</sup> 小春<sup>こはる</sup>。

僕の一年上の先輩で、名前はとても可愛いのだが、性格は360°違う。

かなり荒っぽく、人を無理矢理引っ張って連れて行くタイプの人だ。

おまけにこの小春先輩、めっちゃ強い。

先輩は帰宅部だけど、空手部や柔道部の人なんか楽に倒してしまう。

当然僕みたいなひよろひよろは勝てっこないから、しっかり与えられた仕事をこなさないと、とんでもない目に遭ってしまう……

「ん？ こいつはいったい誰なのだ？」

当然今のレイルの言葉は僕に対して言ったものだ。

しかし、小春先輩は魂状態の僕なんか見えっこない……

「……………なんですって？ 今の言葉、よく聞こえなかったわよ。なあに？」

ヤバイ、かなりヤバイ。

今の先輩はまさにブチ切れ寸前。

この状態で怒らせたら、僕（の体）はかなりとんでもないことになる

る……

―レイルう!!　こ、小春先輩をこれ以上怒らせたらだめえ!

僕は必死でレイルに伝えた。(勿論小春先輩には聞こえてないよ)

………何しろ僕の命(?)がかかっているのだから、必死になるよ。

しかし(というか、やっぱり)

「小春?　この娘のことか?」

と、思いつき声に出して僕に尋ねてきてしまった………(もちろん先輩には僕が見えない!)

「………知我あ。二度あることは三度あるってこのことね………  
…そういえば、これで三度目ねえ………」

ボキボキボキイイ

ひいひい!!

もう先輩は腕をならして、もう今すぐに飛びかかってくるという感じで話している。

―先輩いい!!　今の言葉は先輩に言ったんじゃないですよ!  
ぼ・く・に・言ったんですう!!

僕はもうほとんど(体があったのなら)涙目状態で先輩に懇願している。

でも、結論先輩には僕の姿が見えないプラス僕の声が聞こえない………

「くああくごおお!!!!!!」

もう怒り満タンの先輩の拳が、僕の体（に、入り込んだレイル）に襲いかかった！

―レイルうう！！

「ふんっ！」

一瞬僕は目（無いけど）をつぶりそうになったが、すぐにレイルが先輩のパンチを『片手で』止めていた…………

「…………ふん、この程度か…………」

レイルが言った。

「な…………私の拳を片手で…………ふうん」

先輩はすぐに突き出した拳を下げると、静かに言った。

「強くなったじゃん。知我」

…………へ？

「まさか私の自慢の拳を片手で止められるとはね…………でも私の真の實力はこんなもんじゃないよ。次は本気でいくからね！」  
な、なんなんだこの展開……

「ふっ…………おまえもかなりの力を持っているようだな…………私も気に入ったぞ」

相変わらずレイルはレイルで突っ走ってるし…………ひいい。

「へえ…………まだ口が治ってないようだねえ」

―ひっ！

「…………ま、今回は許すか。で、知我的實力を受けて、これから挨拶代わりに今の五分の一程度しかないパンチを繰り出すとするか…………」

—え、えええええ………そんなあ。

「じゃああとは私がやるから、知我はとっとと帰んな」  
そういうと先輩は書庫へ入っていった。

僕は、すっかり腰（ないってば）が抜けてしまった……………

—レイル。勝手なことしないでよ。僕の体なんだから。

僕はレイルに言った。

「そういえば、おまえの体だったな。すまん」

—でもこれから毎日先輩のパンチをくらうことになるなんて……

考えただけで目が回ってきた。

「私がこのままで居ればよいだろう。五分の一か……指先程度か？」

知らないよそんなこと……

でも、

まちがいなく、

明日からは日常をぶっ壊した生活になるんだろうなあ……………先輩のことをどうにかするまで、しばらくこのままでもいいそうだ。

「さて…………そろそろ帰らせてもらうか」

—ええ…………僕、もう動けないよ。

「そうか…………ならしょうがない」

レイルがそう言ったとたん、突然僕の体が引っ張られた。

「家の場所がよく分からないのだ。案内してもらおう」

—え…………この引きずられた状態で？

「しょうがない」

そうして僕は、魔王レイルに引きずられながら（？）やっと、この学校を後にした。



#### 四話目：姉登場（前書き）

この話は、ちよっぴりシリアス入ってたりします。  
（ホントにちよっぴりですが；；）

## 四話目：姉登場

僕『達』は家に向かう途中、いろいろなことを話した。

僕からは、現代のことを簡単に説明した。

それから学校のこと。

友人関係や先生、先輩のこと（勿論小春先輩含む）など様々なことを、こっちのほうははかなり詳しく話した。

何しろこれからしばらくはレイルが『僕』として生活するんだから、さっきみたいに接していくと、とんでもないことになってしまいうんだから……………

一方レイルからは、『魔族』のこと、自分が封印される以前のことなどを話してくれた。

レイルの話の内容は、よく分からないところがあったが、要約すると…

どうやらレイルが居た時代は、人間や魔族、そのほか様々な種族すべてが一緒になって存在していたらしい。

といっても、『国』というものの中にその種族がすんでいて、国同士の『狭間』といわれる場所でそれぞれの種族が交流していたらしい。

しかし、ある時魔族のものが、勝手に他の種族に向かって攻撃を始めてしまった。

そこから種族同士の大戦争になってしまった。

魔族の王であったレイルは、実際は戦争のきっかけになった攻撃に全く関与してなかったんだけど、他の種族達からの一斉攻撃を受けて、封印されてしまったらしい。

「……………まあ関与してないとはいえ、元は私の不注意のせいである大戦争が起きてしまったのだ。今でも……………少し罪悪感はあるがな」

―……………そうなんだ。それで、その戦争の後はどうなったの？

「すべての種族が争ったわけだ。私を封印したときは世界はもうめちゃくちゃだった。……………たぶんその後、全てが滅びて、今のおまえがいる世界に変わったのだろう」

―そうなのか……………

なんだかとても寂しかった。

自分たちが、自分たちの世界を滅ぼしてしまうなんて。

―あ、その家が僕の家だよ。

僕は赤い屋根の家を指さして（？）言った。

「ほお……………ここか」

レイルが言った。

―たぶんもうひかねえ晃姉が帰ってると思うから、鍵あいてると思う。

「ヒカリ？ おまえに姉がいるのか？」

―まあ、一応。

僕がそう言った後、レイルが玄関の戸を開けた

途端——

「光う！  
もう遅いわよ！」

—  
わ  
つ

「おつと」

突然玄關にいた（たぶん待ち伏せしてた）晁姉に怒鳴られた。

「あんたの好きなカレーつくって待ってたのに……」

—ああ、ごめん。

僕が言った後、はっとした。

—晃姉には、今の僕の声が聞こえてないんだ……  
………なんだか寂しかった。

いつも普通に会話してて、それが当たり前になってたから、余計。

「……おい、どうすればいいのだ？」

レイルが小声でそつと僕に問いかけた。

—……すぐに戻るから待ってて、っていつといて……

僕はレイルにそれだけ伝えと、そのまま二階の自分の部屋へ戻っていった。

## 五話目：最初の夜

僕は、自分の部屋の中をまじまじと見つめた。

脱ぎっぱなしのパジャマ、整備されていないベット、教科書やプリントだらけの机……こうしてみると、かなり汚いな………

でも何より、僕の日常を物語っているそれら全てが、遠いところにあるような気がしたのが少し切なかった。

………これからレイルが使うことになるこの部屋は、これからどう変わっていくんだろう……少し楽しみだ。まさか全く変わらずこのままって事は………

「戻ったぞ」

背後からレイルの声がして、思わずはっとした。

「しかし………この部屋………」

——うう……悪かったな。

「なんだかんだで、早めに降りていった方がいいと思うが」

——分かってるよ。……あ、光姉との会話は大丈夫だった？

「一応おまえが言ったとおり話したが………」

なんだかとても顔を赤らめるところを見ると、よっぽど恥ずかしかったらしい………

………ちよっと見たかったかも。

——じゃあ降りるか。

その後は僕にとってはさんざんだった。

まずレイルが現代生活について全くの無知だということが分かった。

夕食のカレーを食べる時も、一度も食べたことのない物への驚きを隠すのが大変だった。

……………おかげで晃姉にめっちゃめっちゃ怪しまれた。

その後についても、自分の普段の生活をみっちり付いて教えるのはとても疲れたし、はっきり言って、なんか嫌だった。

まさか風呂にまで付いていって教える羽目になるとは……………

—ああー……………疲れた…

やっと就寝で、僕は自分の部屋のベットに横になった。

「まさか風呂まで付いてこられるとは……………」

レイルが不満そうに言った。

—僕だって嫌だったよ！

僕はすかさず言い返した。

「ところで、明日はどうするのだ？」

—明日は…

言いかけて僕ははっとした。

明日は学校だが、大変なことに気づいてしまった……

―明日……………テストだ。

## 六話目：初登校（？）

―次の日

登校時刻のため生徒でごった返している通学路を、「光」と「僕」―つまり「レイル」と「僕」―はお互い違った気持ちで歩いていた。

まずレイルだけど……うん、レイルは正直言って、余裕だ。レイルにとっては初登校（勿論「光」にとってはありふれた日常の一枚）だが、別に緊張で力んでいる様子はなければ、一時間後位に行われる予定のことについても、全く気にしてない様子だ。

そしてもう一方の僕だが……恥ずかしながら、いわゆるレイルと正反対だ。こう言えばだいたい僕の様子は分かるのであえて説明しないけど。

「……さっきから何をそわそわしているんだ」  
レイルが―自分の左肩あたりに浮いている僕に向かって―言った。

―ねえ、ホントに大丈夫なの？ 昨日、教科書のテスト範囲の所を読んだだけだけなんだけど……

「まああれくらいで、何とかなるだろう」

―一応君は「知我光」なんだから、あんまり僕の立場を揺らがさないでよね……

「……なるほど。そう言ってるおまえの実力はとてつもなくすばらしいのか……確かにこれは手が抜けないな」  
ギクッ！……！

……実を言うと僕の成績はいい方でも悪い方でもなく、中間というよく分からない場所だ。



………僕はまんまとレイルに一本とられてしまった。

「あ、おはよう！ 光！」

突然、後ろから声がして僕とレイルは振り返った。

―あ、浩介か……

みはらこうすけ  
未原浩介。一口で言うとな僕の親友だ。

レイルは一瞬僕の方を見たかと思うと、すぐに向き直って言った。

「あ、ああ……おはよう」

言った途端、浩介が「ん？」という仕草を見せた。

「光……今日は声低いな。風邪でも引いたか？」

「あ、いや別に……」

「そうか……？」

浩介がレイルを（まあ正確に言えば、「光」を）まじまじと眺める。確かに、なんだかレイルの声は十三歳にしては低いように聞こえた。

―レイル！もつと声のトーンあげて！

「あ、ああ……」

そう返事したレイルの声は、まだ低いように聞こえた。

「？ じゃ、お互い今日はがんばろうぜ」

浩介はそう言うのと、僕らを追い越して行った。

―ふう、一瞬ひやひやしたよ……

「……しかし、おまえの声はずいぶん高いんだな」

レイルが言った。

―ちがうよ！レイルが声低いんだよ。さっきの返事でもまだ低かつ

たし…………

「あれ以上は無理だ。さっきの浩介とやらの声も聞いてたが、やっぱりおまえが高いぞ」

—えええ…………そんなこと無いと思うけど…………

僕はそう言い返した。

—とにかく！ 今日のテストをがんばろうよ。怪しまれないためにもさ。

「そうだな。…………ところで、まだ昨日のやつを見てないが、何処にいるのだ？」

—ああ、小春先輩はもうとっくに来てると思うよ。あの人、朝早いから。

そう僕が言った時、ようやく（なんだかずいぶん長い時間がたったみたいに感じる）校門が見えてきた。……………しかし僕、そんなに声高いかな……………？

## 七話目…テスト開始!

今、僕『達』は一年四組の教室（つまり僕の教室）にいる。

そして現在朝の会で（と言ってもまあ、健康観察とかするぐらいなんだけど）『光』が自分の机に座っている。……………つまりレイルが座っていて、僕は案の定隣でふわふわ浮かんている。

一見何気ない学校生活の一コマだけど（まあレイルが僕の体に入り込んでいる時点で、すでに非日常的だけど）今現在までくるのには、実際はとても大変だった。

というのも、レイルが挨拶した友達全員が『声が低い』って言ってきて……………先生が来るさっきまで何人かに囲まれてしまったのだ……………

—うう……………僕ってそんなに声高かったの？

「知るか！ 私に聞くな」

……………。

「しかし、おまえはそんなに人気があるのか？」

……………が。

—いや全然。友達はいたけど、そこまで人気者って訳じゃなかったから……………いわゆる普通の男の子だったよ。

……………ちが。

「ふっ。私には、ずいぶんお前は変わり者だと思うが……………」

「知我あ！！ いるなら返事！！」

僕らの耳に（まあ、あえて突っ込まない）突然<sup>みお</sup>滯先生の声が響いて

きた。

「えっ？ は、はい!!」  
げっ！

突然のことだったからか、今のレイルの声は、思いつき裏返った。

『!?!?』

予想通り、クラス全体がざわめいた……………  
……………が

「なんか知我君、いつもと違う感じだね」

「今日の光君、なんか大人っぽいね……………」

「知我、今日はどうしたんだ……………」

「おいおい知我、どうしたイメチェンか？」

と、先生までなんか盛り上がってしまったている。

「な……………なんだこの騒ぎは……………」

―それは……………僕が聞きたいよ。

このざわめきは僕にとっては予想外で、なんかショックだった。

というか、さっき誰か『大人っぽい』って……………」

……………そんなに今までの僕は子どもだったのか!?

「……………さてと、とりあえず、今日はテストだ! みんな今日までの  
努力の成果をしっかりと出せよ!」

先生が再び口を開いた。

まあ…僕らはちっとも努力なんかしてないんだけどね…………

そのとき、ちょうどチャイムが鳴った。

さっきまで出来た人の山も完全に引いて、いよいよテストだ。  
といっても、僕は隣で見守ってるだけの存在で、実際にテストを受けるのはレイルだ。

回答紙が配られる。

遅れて問題用紙が配られる。

レイルがペンを握る。

―レイルうー！　なんか分からないところあったらとりあえず僕は聞いて……っていや、とにかくなんかあったら僕に何でも聞いて！  
あれ、でもこれってカンニング？

……と、隣で僕が言っていた時……  
レイルがペンを置いた。

――……へ？

僕はすかさず回答紙をのぞき込んだ。なんと……  
そこには最初から最後まで、しっかり書き込まれた解答用紙があった。

しかも僕の見る限りではおそらくほとんど正解。開いた口がふさがらないとはまさにこのことだ。（……口、無いけどさ）

―すつ……すごいよ！！　昨日たったあれだけやったただけなのに、  
完璧に暗記してたの？

「……まあな」

レイルが小声で言った。

「たかがあれだけの暗記量、私には紙切れよりも軽いものだ」

―へ、へえ……

僕はまだ驚きを隠せなかった。

―……あ、でも後の時間どうするの？あと四十五分も残ってるけど？

「私は待つが……お前はどうせ退屈だろう。どこかへ飛んできたらどうだ」

レイルが少し意外なことを口にした。

―えっ！ いいの？ 飛んできても……

「時間までに帰ってくれば問題ないだろう。それに……」  
少し間をおくと、またレイルが言った。

「『今のお前は周りの者達とは別の場所に存在している』 だから他のものにはお前の姿が見えないのだ。私は、現在おまえがいる場所も見えるからお前が認識できるが、その場所に存在しているわけではない。だからお前にはふれることが出来ないのだ」

レイルは話を（小声で）続けた。

「……だからここに見えているものはお前の世界には実際、存在していない。だからお前には答案用紙も、人も、リングも、鉄筋コンクリートの壁もすり抜けられるぞ」

―……へええ、違う場所かあ……なんか変な感じがするけど、自由に飛び回れそうだね。分かった！ ちょっと行ってくるよ！

僕はレイルに言った。

「まあ、なるべく早く来い……………もしおまえがいない時に何かあったら、『私が』何とかするぞ」

う……………ちよつと不安になってきた……………

ーじ……………じゃあね……………

とりあえず、僕は教室の壁をすり抜けて（！）レイルを後にした。

## 八話目：気になるあの子（テスト中に）

授業中（ましてや今はテスト中）に学校を回るのは結構楽しかった。といっても隣の校舎にまで行く勇気が僕にはないので、一年生のいるこの校舎にだけとどまっているけどね。

いろんな教室に入って、答案用紙をのぞくのはおもしろかった。（普通は絶対出来ないカンニング方法だよこれ……）十人十色。同じ白い答案用紙ものぞくと様々な違いがあった。

僕みたいな（『光』の事だよ）いわゆる『普通』の答案用紙の子もいれば、恐ろしいほど真っ白な子。中にはそれこそレイルみたいに、絶対正解であろう答えをしっかりと書いている人もいて、こっちもなにか恐ろしかった。

とまああちこちまわっていると時間も結構すぎていった。

そして僕は最後の教室、七組の教室の前まで来た。

—さってと……おじゃまして………

姿が見えないとはいえ、一応テスト中に他の教室に入るわけだから、ちょっと挨拶をして後ろのドアから入った。（まあテスト中に他の教室に行く行為自体がふざけてるけどさ）

—……ん？

入った途端、僕はある場所に氣をとられた。

僕はさっきの教室みたいに、入ったらすぐ後ろにつき、どの子がおもしろそうな解答用紙をつくっているか見定めようと思った。でも、後ろに付くよりすぐ、ある席にいる子が氣になった……

その女の子は、特に変わった癖をテスト中にしてたわけでもなく、目立った外見でもないごく普通の女の子だった。



ただ……………

……何となくその子は『めだっていた』

まるでその子にだけ舞台のスポットライトが当たっているかのよう  
な、壁画で言うところの子の部分だけ浮き彫り状態のような、そん  
な感じだった。

僕は何故か、そおくとその子の近くに寄ってみた。テスト用紙を  
見ようとした訳じゃない。ただ……………

「ふにやつ？」

うわっ!!

突然さっきまで伏せ気味だった顔を奇声とともに上げた。

……………どうやらさっきまで寝ていたらしい。

何なのかこの子は……………

彼女は、僕が見たことのない子だった。まあ九クラスもあるのでそ  
んなことはざらにあるのだが、もっとも特徴的なのが、さっきまで  
伏せてて見えなかった目が、なんとなく蒼色だったのだ。

彼女は寝ぼけた目で時計を見ると、答案に向き合って問題を解きは  
じめた。答案を見ると、僕と似たような実力だった。

……………と、その時。

突然彼女が右方向——つまり僕が浮かんでいるあたりをじーっと見つ  
めはじめた。

——…………えっ？ ええっ？

僕はヤバイ！ と直感で思った。すぐに僕はすぐ側の壁をすり抜け、  
急いで五組のクラスへと戻った。

—……………って事があつたんだよ。いったい何だつたんだろうあの子……

帰った時にちょうどテストは終わった。僕はすぐにさっきのことをレイルに伝えていた。

「ほお……………そんなやつもやはりいるのか……」  
いきなり変なことをレイルが口走った。

—えっ？ どういう事？

僕はすぐにレイルに問いかけた。

「おそらくお前が言っていたやつは、私と同じように今おまえがいる『場所』が見えるのだ……………ただ、『めだっていた』と言うことは……………」

—え？ 何、どうかするの？

「おそらく……滅多にいないのだが、そいつはこの『場所』と、おまえがいる『場所』にまたがって存在しているのだ。だからお前は自分と同じ『場所』にいるあいつが目立って見えたのだろう。……さっきの話だと、下手したら気づかれたかもな」  
レイルが最後にとんでもないことを口にした。

——ええっ！！ ……それじゃヤバイじゃん！！

「まあ明日になっても私の元に来ないならまだ大丈夫だ。おそらくぼんやりとしかお前の姿は見えんだろうし、声もはっきりとは聞かえなかっただろう」

ほっ。ひとまず安心した。

けど………なんだかやっぱりあの子は気になった。

僕は決心した。

今日はもう行かない。テスト中もおとなしくこの教室にいるつもりだ。

けど………明日。

そう、再び彼女に会いに行くつもり。

## 九話目：新たなる問題（か？）

さっき心に決めたとおり、この後はおとなしく自分のクラスにいた。（誤解されそうだけど、それは『自分のクラスメイトのみの答案を見て回ると言うこと』）それでも時間はあつという間に過ぎ、もう十二時。下校時刻になった。

レイルはさっさと鞆を片付けて、ほんとにさっさと校舎を出てしまった。（ちなみに廊下で小春先輩とすれ違った。ほんとにパンチをかましてきたけどレイルが『指三本』で止めた）ちなみに僕はまだ、さっきの思いつきをまだレイルに言っていない。

「おい、まてよー」

少し歩いた頃、不意に背後から声がした。

「ちょっとおいてくなよー。校舎出ても全然見あたらなかったからちょっとびっくりしたよ」

レイル  
浩介が少し息を切らしながら僕に話しかけてきた。

―あ、しまった。こいつのこと忘れてた。

僕は、今更思い出した浩介の方を見た。何か僕に言いたそうな顔つきをしている。―でも、どうやら今日暗いことがあったとか、帰ったら家で待ちかまえている鬼の対処方法とかを僕に聞きたいようじゃないみたいだ。

僕が言うより早く、レイルが浩介に言おうとした。何かあったのか  
|

「お前……何かあったのか？」

僕よりも早く言おうとしたレイルより早く口を開いた浩介が言った言葉は、僕らが言おうとしていた言葉と全く同じだった。

「ど、どういう事……」

レイルが少しあわてた様子で聞いた。

「だから、昨日何かあったのかって事。今日登校した時も変だったけど、お前、今日一日中変だった」

ほとんど一本調子で、表情を変えずに聞いてきた。

……でもまさか、『昨日書庫の整理をしていたら一冊の本を開いた時に魔族の王が僕の体に入り込んできたんだ』………とはさすがに言えない。今の僕に口はないけど、たとえるなら口が裂けたって言えない。レイルも浩介の今の質問にどきっと来たのか、苦笑いで返している。

「あはは………いや、別に何も」

そうか、と浩介が返した。

「それなら別にいいんだ。なんか今日の光、いつもの凡人の光みたいに見えなかったからさ……」

ちよっとある単語にむっと来たが、でもそのときの浩介の顔は笑ってるけど、全然笑ってなかった。

気配を察したのかレイルもこの後ずっと口を開かず、帰路が分かれるときに交わした「さよなら」以外は一言たりとも言葉を発しなかった。

—……………なんかほんとにやばいよ。

家に着き、自室に戻ってから僕の第一声が、これだった。

「うーん、たしかに。事情は知らんがずいぶん変なことになりそうだな。あいつの一件が片付いてもまだこんがらがりそうだ」

—そうだよ。あ、あとさ……………

僕はレイルに、明日あの子にもう一度会いに行ってみると言った。

僕はてっきり反対の声が聞こえてくると思ったけど……………

「そうか。それなら私も一緒について行っていいか？」

……………何故かやたら乗り気の返事で返されてしまった。

—ちよ、ちよつと。いくら何でもテスト中に言ったらだめでしょうが。

「馬鹿。誰がそんなに時に行くと言った」

レイルが言った。

「当然放課後に行くに決まっているだろう。実はお前が乗り気か心配だったのだが……………そうか。よし！ 明日にでも彼女に会いに行くか！ そうと決まったら今日はさっさと寝るぞ！」

……と、もはや説明不要の超乗り気でレイルはさっさと布団に入ってしまった。

この変なすれ違いに半ばあきれながらも、僕も早めに就寝することにした。

……そう言えば明日のテスト勉強まだやってないけど、まあだいじょうぶだろう！！

……

……

……おそらく。

## 十話目：棒読み少女

「お前は何者だ？」

.....

……突然のことでみんな混乱してると思います。実際僕も混乱しています。事の発端は昨日の夜。ここはとりあえず省略して……えーまず今日いつも通り学校へ行く。テストが全て終わる。それで下校するとき七組によって……まあいまの状況に。昨日からいきなり今日の終わり、何ふざけてんのかって言われても困ります。えーとりあえずおいといて。

僕が言うよりずっと早くレイルは発言してしまった。しかし突然知らないクラスの子からいきなり、こんな失礼な上に返答に困る質問されてもねえ……。

「.....」

案の定、目の前の彼女は固まっている。

ー……ちよつと。いきなりそりゃ無いでしようが。

とりあえずレイルには注意を促した。どうやら気づいたようだ。

「あっ……っつ、つまりそれは、」

「……何なの急に？」

突然、黙りこくっていた彼女が口を開いた。

「こんな下校時間には訪ねてきてほしくなかったな。話なら休み時間中に言ってよね」

そう言うと、彼女は大きな欠伸をした。



「…ボク、この時間帯は眠いんだから」

「……………そっちなか？」

さすがのレイルも呆れている。

しかし、ほんとになんなのだこの子は……………

―一応さつきみたいに怪しい質問みたいにならない範囲で発言して。

僕はレイルに言った。レイルは身振りでボクに了解サインを出した。

「そ、それで君は、時々変な物が見えたりとか変な声が聞こえるとか、そんなことはないのか？」

「ボクの名前は素隙野<sup>すすきの</sup> 憂<sup>ゆう</sup>だよ。ボク、名前意外で呼ばれるの好きじゃないんだよねー」

「…じゃあ素隙野」

「名前だよ、な・ま・え・」

「……………憂、それで何か変なことはなかったのか？」

すっかり憂の要望を押しつけられていて、レイルは結構辛そうだ。

…というか、赤面している。しかも少し「素」が出てきているように感じた。

「んー特に無し。たまに目の前に透き通っている物体が浮いていたり、煙っぽいのが見えたりとか、そんなことはあるけど別にな変わった事じゃないしなー」

思いつき変わったことでしょうか。

たぶんレイルも今同じ事考えていたと思う。

「あ、でも君の右斜め上あたりにある人型の薄い影みたいなのかなは、滅多に見えないかな」

そう言って指さしたのは……………はい、僕です。

―あーあ、やっぱり分かっちゃうのか。どうやら声までは聞こえな

いみたいだけどさ。

「ああ……そ、そうか……じゃあ、今日はこれで。さよなら………」  
レイルがもう会話を終えてしまった。

憂の方はまた大欠伸をして、それから全く気にしていない様子で帰っていった。

「……………私はまた一つ学んだぞ。人間にも、いろいろな種類がいるものなんだな」

僕も……………同感だ。

## 十一話目：進展アリ（いろんな意味で？）

―全く、なんなんだかあいつは……………

僕はぶつぶつ小言を言いながら、玄関に向かうレイルの後に付いていた。

―あれも一個性なんだろうけど……………そこまであるか？

「さっきから耳元で五月蠅いぞ」

ついに業を煮やしたレイルが僕に言ってきた。

「そんな事言うお前も十分個性派ではないのか？」

―……………はあ？ そんなこと無いって。僕は何処にでもいる普通の中  
学生だよ。

「……………そのファッショセンスでよく言うな」

―うう……………悪かったな。

「あっ、いた！ おーい光う！」

???

突然の声に僕は振り向くと……………そこには、小春先輩がいた。

「お、どうしたんだあ？ その子は。ガールフレンドか何かか？」

……………へ？

な、何を言い出すんだ突然この人はっ？

僕はあたりを見渡すと……………

……僕らの直ぐ側に、素隙野憂がいた……

『えええええ えええええええええええ！！！！！  
いつのまにっ？』

「ボク、さっきからずーっとひつついてきたけど？」

「ええ？  
光う、どーゆうことだそれ？」

げげっ。  
小春先輩、かなり誤解してるぅ……………

「はあ？ 何勘違いしているのだ？ 私はこいつとは別に何も……」

レイルは小春先輩の前だからか、『素』で普通に会話しているけど

……すぐに第三者がいるんですけど。

「ふふっ。光もなーに誤解してるんだか」

当然そんなこと気にせずにからかい続ける先輩。

……って、あれ？

先輩、いつから僕のこと名前で呼ぶようになったんだろうか……

「……ところで、一体何の用だ？」

「おいレイル。隣の方を忘れていませんか。」

僕の問いかけでやっと気づいたらしいレイルは、少し慌てた様子を見せた。

まあ、なんか憂の方はさっきから大欠伸してて、気にしてないみたいだけど……

「もうすぐ夏休みよ？ だから………いざ、勝負っ！！！」

突然ビシッ と指さして先輩は言った。

「よ………分かった。僕はいつでもいいよ」

「ちょっとどうした。急に口調変えて………彼女が側にいるからか？」

と、憂の方を指さして言う先輩………  
………だから違うって。

「い、いや………別にそれは……」

「ま、いっか。じゃあ最終授業日、放課後に鉄橋の河原のところでな」  
そしてVサインをした後、小春先輩は僕らを追い越して帰って行った。

「ふう………全く気楽な人だなあ……」

「……あと一週間後か」  
レイルが僕に向かって言った。

「まあ無茶しない程度にしてよね。後々僕が困るから。」

「………分かった」

レイルがやけに小声で言った。

「ん？ 終わった？」

ふと、さっきまでここにいたはずの憂が突然口を開いた。

「え、突然どうしたんだ……」

「ん？ どうした突然」

レイルが僕の言葉をそのまま口にした。

「終わったんならさっさと帰ろうよ。ボク、さっきから眠くて眠くて」

『……………さっきまでの話の流れ、聞いてたか？』

僕とレイルが、ほぼ同時に同じ事を口にした。

「とりあえず、なんでついてきた？」

「あー。やっぱりその陰が気になってさー。だからこっそり後付いてきた」

ー全く気づきませんでした。

僕は思わず口を開いた。

「でも、もういいや。なんか変にうごめいてたけどそれもおさまったし。じゃー」

と言うと、また彼女もさっさと帰って行ってしまった。

ー……………変な子だね。憂って。

僕が言った。

「……………ああ」

続けてレイルが言った。

十二話目：傍観してない（！）僕からの独白（？）（前書き）

今回は、独白にお付き合いください。（？）



## 十二話目：傍観してない（！）僕からの独白（？）

—はぁ疲れた……

僕は家について早速ベットに横になった。ちなみに、レイルは下で食事をとっている。

今日は結構疲れる一日だった。

素隙野憂のこと、小春先輩のこと……それからもう一つ。僕がすっかり忘れてたことがあった。

僕は部屋にかかっているカレンダーを見た。

七月二十二日のところから終わりまで、約十日間ぐらいの日付全てに丸印が付いている。

その丸印の始め、二十二日の欄には……『浩介と、別荘で』と書かれていた……

まず先に言っておくと、この『別荘』には「僕たちの」という主語は付かない。

付くと思っていた人、ありがとう。  
誤解でもなんか嬉しい。正直。  
付かないと思ってた人は……………

……………

……………別にもないって。

話がそれたけど、毎年夏休みに僕は浩介の親戚が持っている湖の近くの別荘に、浩介と一緒に十日ほど遊びに行っている。  
それがもう僕にとっては年中行事のようになってる。（だからカレンダーにも前もって印がつけてある）  
でも、今年はレイルの事やら何やらがいろいろあって、すっかりそれを忘れてしまっていた。

今日の帰りに浩介が話しかけてくるまでは。

……………

……………考えてみると、今年別荘に行くのは実質レイルなんだよなあ。

そう考えると僕は悔しくなった。  
でもしばらく騒ぎ続きだったから、ここでゆっくり傍観者になるのも悪くないのかもしれない。

……………『ゆっくり』出来るか、保証が限りなく低いのが辛いけど。

おっと、もうレイルが戻ってきたみたい。風呂の着替えでも取りに

来たんだろうな。

では、僕は小春先輩との一戦まで、傍観してない『傍観者』を続けていくとしますか。

## 十三話目…遂に全ての決着……………(?)

ザッ—

誰もいない小さな雑木林の少し開けた所。

そこで、レイルと小春先輩が向き合って立っている。

—今、戦いの火蓋は落とされた

「……………言っておくけど」

レイルが口を開いた。

「手加減はしないぞ」

「……………ああ」

これは小春先輩。

「こっちこそ!!」

二人の激闘の様子は、あえて言わない。

何十分もの解説の時間を与えられても表現しきれないほどの『激戦』だったから。

強いて言えば、火花が散ってるような。

僕はそれこそ、木の陰から二人の『激戦』を傍観していた。

もう決着つきます。（省略すんな系のツツコミ無しで）

二人とも血まみれ……じゃない！ かすり傷ぐらいしか確認できない。残念。（コラコラ）

「……………」

「……………」

「……………」ふう。負けたよ」

先に口を開いたのは……………小春先輩だった。  
レイルは一切口をきかず、しゃがみ込んでいる先輩を、ただぼうつ  
と見ていた。

―遂に……………ついにこのときがつ……！！！！

「おいおい、何をそんなに騒いで……………」

今、僕らは図書室の書庫にいる。

会話から分かるとおり、目の前にあるのは、あの新品本。（つまり封印の書？）

つまり……………そう言うことだ。

「……………開くぞ」

僕はちらつとレイルの表情を見た。別にどうって事無かった。ぱらぱらとページをめくり始めたレイル。しばらくした時だった。

カツ……！！

―あっ！ この光は……………！！

僕はこの光を、忘れてはいなかった。

眩い光が僕らを包んでいく……………

……………





## 十四話目（別の名で最終話）…帰る

どのくらい時間がたったのだろう。

いや、実際全然時間はたっていないんだけど。

しかし、これでやっと元の体に……。

………

！………あれ？？

僕は自分の体を確かめた。

しかし………

………元には戻っていなかった！！

「………な………あれ？」

レイルもやっぱり戻っていない。僕の体で辺りを見回している。

「ねえ、どういう事？ 一体どうして戻ってないの？」

僕は言ったが、しばらくレイルは黙ったままだった。

しばらくして………

「………ひょっとしたら！」

突然、レイルはすごいスピードで図書室を飛び出していった。

僕は突然の行動に驚きながらも、急いで後を追った。

―ここ…………七組？

そう、レイルが向かったのは、一年七組の教室だった。  
そして、そこには一人の人影があった。

「あれ…………君は…………」

それは、うたた寝していた憂だった。

「ちょっと来い！」

「な、何なのさ急に」

レイルは憂を引っ張って再び書庫へと戻ってきた。

そして、片手に例の新品書（で、押し通します）片手に花…………も  
とい憂の手を握った。

そして、目を閉じる。

しばらくしてから目を開けて、ただ一言、言った。

「やっぱりそうだったのか…………」

僕には訳が分からなかった。いや、もうこの際訳が分からなくていい  
やと思った。

レイルは憂に新品書を指差して、開けてくれと指示した。

「むむ……………これでいいの……………」

憂がページを開いたときだった。

カ  
ア  
ツ  
！  
！  
！  
！  
！  
！  
！

さつきよりもっと、いや、ずうーっと強い光が僕たちを包み込んだ。

僕は光に吞まれないように二人を見た。

憂はまだ訳が分からないように、ぼーっとした顔つきをしている。レイルは、どうってことな……………違った。はつきりとは分からなかったけど。

カ  
ア  
ツ  
!  
!  
!  
!  
!  
!  
!  
!  
!  
!  
!

うわっ！

「ここは……………」

図書室、と自問自答しながらおきあがった。

「うう……なんだ今のお？」

これは憂。

それで終わり。

会話はそれで終わった……………

………戻ってる!!

ずっしりと重い僕の体。起き上がるのがずいぶん大変に感じる。  
久しぶりの、床や、棚などの物体の感触。

とても嬉しく感じた。

ふと、僕は足下に転がっている本に目を向ける。

誰が見ても、分厚い書庫似合いの本――

そのどうってことない本で、様々な思い・感情が巡ってきた――

僕は、それを拾い上げる。

そしてどうってことないように、棚に戻る。

そして、憂の方を向いて一言

「帰ろう」

—さあ。

帰りましょう。

非凡の平凡。日常へ。

## 十四話目（別の名で最終話）・・帰る（後書き）

これで、「僕とレイルの取っ替え騒動記」は終わりです。  
今までご愛読、有り難うございました。

未熟な私ですが、これからの小説も、どうぞよろしくお願いします。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6653c/>

---

僕とレイルの取っ替え騒動記

2010年11月13日02時30分発行